

正月の遊戯も非常に変遷したようである。先ず大人の遊びとしては、昔虚栄の巷であつて、今日は下等な遊興場になっている遊郭などで行われたくさぐさの遊びが、ものの本に書き残されてあるけれども、今は見るかげもなく廃れてしまっている。で、正月の遊戯といえは子供等のものに限られているようだ。かるた、双六、寶引、羽根つき、紙鳶などといった多くの遊びの中にも栄枯盛衰がある。明治の世になってから、かるた、双六などはまだ盛んであろうが、羽根つき、紙鳶などに到っては殆ど廃れてしまったといつてよい。電車自動車人力車の往来頻繁な世の中では、羽根つきの優美な姿は浮世絵などでその面影を忍ぶのみである。電信電話線が縦横に張られている大空には紙鳶の雄姿が見られなくなった。しかしこれに代わつて正に流行せんとしている飛行機凧というものがあるけれども、すでに事実上亡んでしまっているこの紙鳶に比べては趣味の少ないものであると思う。

世は春になって、大空に五彩の色美しい絵や、蒼龍踊るが如き文字の紙鳶が盛んなる「うなり」を高く響かせながら、悠々として雲にかけ橋のような壯観を現すのは明治の初年頃の光景で、空っ風の寒い雪空に、元気な子供等の糸を手にして空を眺めながら飛び回っている有様は実に勇ましいものだ。紙鳶揚げに上手な子供になると、「両かしぎ」というもので、紙鳶を前後左右思いのままに大空を駈けさせる有様は誠に心持のよいものである。幼い児の雲際までも高く人に揚げて貰った糸を握ったまま、仰ぎ見て余念のないのも面白いものだ。大空に揚がった紙鳶が、互いに覇を雲際に争つて、遂に切り合うが如き惨劇を演ずることがある。その戦争の武器は、糸に「がんぎ」というものを結びつけ、敵の紙鳶に肉薄してその生命と頼む糸を切ってしまうのである。

紙鳶に用いる骨に色々の種類がある。障子骨というのはその文字通りの骨を使つてあつて、なかなか上品な立派なものだ、「巻き骨」というのは、紙で骨を巻いたもので、これも上品なものだ。また「六本骨」「七本骨」というのがある。「六本骨」は左右両端から交差させた二本の骨に、その交差点を貫く一本の真直ぐな骨と、横に二本の骨の入つたものである。「七本骨」は「六本骨」の横の二本が三本になっているものである。六本骨七本骨は普通の紙鳶に多い。「六本骨」に「堀龍」といって、今少し小さい形横に入つた二本の骨の中へ丸く、「龍」という肉太の文字が書いてある。一風変わったものだ。

紙鳶の種類にも色々ある。扇凧、絆纏凧、鳶凧、蟬凧、行燈凧等は平凡なもの、「奴凧」は名に似合わぬ形の女性的なものだ。また「三番凧」は頗る滑稽なもので、表が金紙、裏が銀紙といったもので張つた二つの大目玉が糸をひくたびに目玉がくるくると回つて、舌をペロペロとひるがえすところ、面白いものだ。「ぶか凧」というのは何故の名とは知らないが、幼い児等がよろこんで用いるもの、近ごろ一寸流行している「こま凧」は「まるめ凧」より横骨の一本多いけれど、何をいつても三本骨のこととて力が弱いようだ。また「千住ばり」というのがある。これは千住辺で拵えるからだといわれている。多くは障子骨で、西の内二枚半の大きさで、「いとめ」の長さ四間、その数、十七条もあるのに加えて、いつ

も ^{こうがい} 筭 という「うなり」を筭の如く頭につけている。見かけはいかにも豪気だが働きの鈍いものである。

「うなり」にも色々ある。鯨うなり、籐うなり、真鍮うなり、護謨うなり、ぶうぶううなり等で、「鯨いなり」の声は細い甲高いもので、あたかも美少年の唱歌するのを聞くようなものだ。「籐うなり」は強烈で勇敢なる戦士の吟ずるようなもの、「護謨うなり」は心無い男が口角泡を飛ばせて、わめくようなもの、「ぶうぶううなり」は紙で拵えたうなりで如何にも不平をぶつぶつ訴えているように賤しい。

「がんぎ」というのは、空中戦争唯一の武器で、木で拵えた鍵形の中に刃をつけておいて敵の糸を切る役目をするものである。「まめがんぎ」「両頭がんぎ」「十文字がんぎ」「鎌がんぎ」「竹がんぎ」等の種類がある。「まめがんぎ」は極く小さいものだが、丁度小粒でもピリリとくる山椒のように、よく役に立つものだ。「両頭がんぎ」は丁字形の鍵の両側に各々刃をつけたもので、いかめし相だが、うどの大木のように役立たぬもの、「十文字がんぎ」は文字通りに十文字になったもの、「鎌がんぎ」の鎌のようで、極めて鋭利なものだ。

「竹がんぎ」は肉を取り去った竹の外皮だけを糸に結びつけてある。それが空でピカピカと光って如何にも鋭利そうだ。「さる」といって丁度よく飛揚した紙鳶の糸に、小さい孔をあけた色紙がつけ木を貫き通しておく、その色紙やつけ木が風を受けて、くるくると回りながら高く昇って行くさまは興味のあるものだ。

絵凧に多いのは、大目玉を蠟で塗った達磨、月夜に兎、童子格子、日の出鶴、雲龍、玉取り龍、鯉の滝上り、山姥金太郎、加藤清正、神功皇后等で、昔からあまり変わらぬようだ。また近頃の軍服をつけた人か、サーベルを振りかざして勇威を示している絵のものや、金鷄勲章のものは日清戦争この方始めて出来たものである。字凧には鷲、獅子、虎、龍等のものが多い。また魚、嵐、鶴とかのものもある。

前にいった「堀龍」は坊主凧のことで、尾をつけると白紙凧と同じように「とむらい凧」と罵られるので人は余り悦ばぬ。凧の尾の名に可笑しいのがある。達磨十本と云って尾の形がY字形をしている。「たぐる」は手繰ること、糸を自分の方へ収めること、「だまをだす」は確か ^{おだまき} 苧環を出すということで、糸を凧の方に放ち遣ることである。下世話にこれと同じことをいうのもここから出たのであろうか。

人がよく「うづき」とか「とんきり」とかを試みにやってみたり、また凧自身が「めんくらう」とか「のす」とか「かかぐ」とかいう動作をするが、これはみんな「糸め」の付けようが悪いためである。その証拠には左右両側についている「はしいとめ」の長さが同じであったならば、右にも左にも「かしぐ」ことはないのである。また「めんくらう」こともない、至極泰然たる姿勢を出すものだ。「上いとめ」が余り短かくなると「のす」という憂いはない。また「下いとめ」がほどよくいって、「胴いとめ」に弛みがなかったら、風さえ吹いていれば凧はずんずん飛揚していくものだ。「乳いとめ」や「腰いとめ」がよく釣り合っていると、烈風に尾がなくとも、手繰ると凧然として立ち、ゆるめてやると飄然として去ってしまう。その変化するさまが面白いのである。